



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 1 0 月 2 4 日 (金)

発行 館長 加 藤 智 一

山形県蔵王の国際的評価と地域振興への展望

蔵王温泉は、開湯 1900 年を誇る日本屈指の古湯です。西暦 110 年、日本武尊の従軍者・吉備多賀由によって発見されたという伝承が残り、長きにわたり湯治場として親しまれてきました。泉質は日本でも有数の強酸性硫黄泉で、殺菌効果や美肌効果に優れ、「美人の湯」としても知られています。また、蔵王は四季折々の自然美に恵まれています。冬には「樹氷」が山肌を覆い、幻想的な景観を生み出します。また春から秋にかけては、登山やトレッキング、紅葉狩りなど多彩なアクティビティが楽しめます。特に、火口湖「御釜」はエメラルドグリーンの水面が印象的で、蔵王の象徴的存在です。実は私、40 年ほど前に冬季間、旅館で住み込みのアルバイトをしておりまして、仕事が終わった午後には旅館からリフトのフリーパス？をお借りしてスキーや放題の日々を送っていました。また夜には、夕飯の後片付けをしながら、スキー教室でいらした女子高生たちのお楽しみ会というか演芸会というか、大騒ぎしている様子を大広間の後ろで眺めるのも楽しみでした（不純な動機は一切ありません!!）。そんな在りし日の蔵王温泉ですが、近年は廃業する旅館も多く、めっきり寂しくなりました。何とか元気を取り戻してもらいたいと思っていた矢先、今日の山形新聞 2025. 10. 23 に興味深い記事が紹介されていました。なんと、米国の有力旅行誌「ナショナルジオグラフィック」が発表した「2026 年に行くべき世界の旅行先 25 選」に、山形県の蔵王が日本で唯一選出されたというではありませんか。この快挙は、地域の自然資源と文化的魅力が国際的に認められた証。観光振興における大きな転機となって欲しいと切に願わざるをえません。今回の選出では、銀山温泉や出羽三山の修験道体験、月山の夏スキー、白川湖のカヌーツアーなど、静寂と神秘性を併せ持つアウトドア体験もあわせて評価された結果ということで、これはオーバーツーリズムに悩む都市型観光地とは異なり、持続可能で地域密着型の観光モデルとして注目された結果でもあります。

この国際的な評価は、山形県にとって間違いなく観光産業の活性化に直結する好機です。特に欧米圏の旅行者にとって、「ナショナルジオグラフィック」の推薦は信頼性が高く、旅先選定の重要な指標となっているそうですので、インバウンド需要も増えるでしょう。宿泊施設、交通機関、飲食業、観光ガイ

ドなど地域経済の多方面に波及効果が生まれるはずです。また、観光消費の拡大は地元産品の販路拡大にもつながり、山形の特産品であるさくらんぼ、米沢牛、日本酒、漬物などが、観光客の購買意欲を刺激し、地域ブランドの向上にも寄与するはずです。さらに、観光を契機とした移住・定住促進や、地域資源を活用した起業の可能性も広がることでしょう。

一方で、観光客の増加に伴う課題も予見されます。外国語対応可能な案内板やスタッフの配置、キャッシュレス決済の導入、交通アクセスの改善など、インフラ面での対応が求められます。また、地域住民との共生を意識した観光政策も必要でしょう。観光客の増加が地域の生活環境に悪影響を及ぼさないよう、ゾーニングやマナー啓発、混雑緩和策等も講じる必要があるかもしれません。また、観光資源の保全にも配慮が必要です。樹氷や温泉など自然環境への負荷を最小限に抑える取り組みが求められます。さらに、観光の一過性を防ぐためには、体験型・滞在型のコンテンツ開発も重要となるでしょう。例えば、地元の作家による工芸体験、農業や発酵文化に触れるワークショップ、地域の祭りや伝統行事への参加、樹氷再生プロジェクトに参加してもらうなんていうのも良いかもしれませんが、観光客が地域の暮らしに深く関わる仕組みづくりも鍵となります。

そんな心配を知ってか知らずか、同じく山形新聞には、2026 年秋、山形県蔵王温泉に星野リゾートの温泉旅館ブランド「界」が新たに開業するという記事が掲載されていました。全国に 23 施設を展開する「界」ブランドが、なぜ今、蔵王を選んだのか。自然と歴史の融合が、近年注目される「持続可能な観光」や「ウェルネスツーリズム」の潮流と合致したということなのでしょうか。「界 蔵王」は、かつての「ZAO センタープラザ」跡地に建設され、地上 8 階建ての本館と、隣接する大浴場「湯小屋」から構成され、全 49 室の客室に加え、最大の特徴は、蔵王の火口湖「御釜」をモチーフにした 360 度のパノラマが楽しめるルーフトップテラスができるそうです。これを契機に、蔵王が再び「旅人の憧れの地」として輝きを取り戻す日も、そう遠くはない・・・と思いたい。

